

## 生物資源学類

学生の確保 (人)	年次	定員	志願者	受験者	合格者	入学者		
	1年次	120 (120)	436 1 (372)	436 1 (372)	131 0 (133)	130 0 (132)		
編入学・再入学	10 (10)	65 0 (39)	65 0 (39)	13 0 (18)	11 0 (16)			
学生の進路 (人)	卒業者	就職者	就職者の内訳			研修医	進学者	その他
			企業	教員	公務員			
	151 0 (153)	51 (42)	43 (34)	0 (2)	8 (6)	0 (0)	79 (83)	21 (28)

・ ( ) は前年度の数値を、 は外国人留学生を内数で示す。

### 1 生物資源学類の活動

#### 【教育】

- 本学類は、生物、環境、自然ならびに人間の生物生産活動に関して専門知識を有し、農林業関連産業とそれに関わる人間社会と人工系・自然生態系を地球規模から分子規模までの広い視野で探究でき国際的視野を身につけた人材を養成すると同時に、人間としての幅広い教養と豊かな人間性、とりわけ生命・生物環境に対する哲理と倫理を有した人材を、個性と学習意欲を伸ばしつつ養成することを教育目標としている。この目標を達成するためにカリキュラム等の見直しを行い、一部改訂した。
- 次年度以降の履修をより円滑にするために、1, 2, 3年次生に細かく履修指導を行った。とくに、年度末に進級に関する指導を詳しく行った。また、4年生へは、卒業要件の確認に関して詳しく指導した。
- 「履修科目登録単位数の上限設定及び早期卒業制度の導入に関する基本方針」を推進するため、登録単位履修状況調査委員会を設置し、その内規を制定した。その結果、1年次生9名が卒業要件の単位を40～45単位修得し、その90%以上がAの評価であった。これらの学生に対し、次年度(2年次)に上限を超えて55単位までの履修申請を認めた。
- 3年次編入学試験を実施し、多様なバックグラウンドを持った幅広い人材を受け入れることができた。また、入学生の単位読替え指導をきめ細かく行った。
- 入学試験制度の多様化を図り、AC入試制度を実施し、平成15年度に6名の入学生を受け入れることにした。
- 推薦入試枠33名の内8名を専門高等学校及び総合学科制の高等学校卒業生への特別枠として受け入れた。また、これらの学生を主な対象として補習授業を、英語、生物学、化学、物理学の4科目について実施した。
- 社会の第一線で活躍している本学卒業生を講師に迎えてオムニバス方式の特別講義を行い、受講者へ多分野の最先端情報を与えると同時に、進路選択などについて多面的な好影響を与えた。
- 学生の職業意識を高めるため、インターンシップを3科目について実施した。とくに、昨年度より開設したインターンシップ2科目(国際農業研修、 )については、国際協力事業団筑波国際センターの協力を得て、同センターで実施している外国人技術者対象の研修コースに参加させ、2名の学生に単位を認定した。この研修は、外国人との交流も含まれ、非常に好評である。また、タイ国への海外研修を実施し、海外における農業の実態と農業に関連するユネスコ等の諸機関の活動の内容を体験・調査させると同時に国際交流を深めさせ、参加学生4名(他学類生4名)に同様に単位を認定した。
- 分散型電子計算機システム生物資源学類・農学研究科サテライト管理委員会を強化した。また、ホームページの充実を検討し大幅に改善した。ホームページには、シラバスと「生物資源学類教官の研究内容と担当授業科目」を掲載しているが、これらにキーワードによる検索システムを導入した。
- 日本技術者教育認定機構(JABEE)の「農業工学関連分野教育プログラム」の認定に関する試行を受けた。農林工学系所属教官が中心となり実施したが、その審査結果は、今後の教育改善に大きく寄与するものと思われる。

#### 【学生生活】

クラス担任及び学生担当教官が中心となって学生の厚生補導に関してきめ細かい指導を行った。本年度は、学生が大きな交通事故の被害者や加害者となるケースや暴力事件の被害者になるケースがなかった。

クラス連絡会を10月、2月に開催し、学生側からカリキュラム編成、教育内容(特に必修科目、専門基礎科目、語学)などの教育問題及び生活等に対する問題が提起され、議論が活発に行われた。とくに、学生が独自に行った「授業評価」の結果について説明を受け、教官が行っている「学生による授業評価」の参考となった。

就職に関しては「就職情報」を作成し、学生への情報の提供を行った。さらに、職種別の公務員説明会を数回開催した。また、各卒業研究指導教官による個別的就職指導を行った。

#### 2 教員の教育業績評価の状況

実験・実習を含めた本学類開設の全授業科目について学生による授業評価を実施した。平成13年度の結果を科目群ごとに分類して取りまとめた資料を作成した。この内容を各教官に周知し、次年度以降の授業の改善に、またカリキュラム編成に反映させることに努めた。とくに、複数で担当している科目についての連携強化に努めた。授業評価項目及び授業評価の方法については、教育課程委員会において検討を行い、指針「学生による授業評価の改善について」を取りまとめた。平成15年度当初にFD委員会を設置して、教育方法の改善も含めて活動することにした。

#### 3 自己評価と課題

教育組織、教育内容ともに改善すべき点が見られ、前年度から引き継いだ問題点を学類教育課程委員会で検討するとともに、学生による授業評価を踏まえてカリキュラムの改善を進め、教育目標を達成したい。とくに、本年度策定した学類の「中期目標・中期計画」の内容を多面的に実行する必要がある。平成13年度に設置した「将来検討委員会」において、学類の運営、教育体制、入学試験制度等について総合的に検討を行っているが、その結果、現行の2主専攻体制を見直し、カリキュラムを大幅に改訂することになっている。

- 教育組織とカリキュラムを調和のとれたものとする。
- 中学校・高等学校の指導要領の改正にもなって進学してくる学生について、新たな教育目標を構築し、それに対応するための新たなカリキュラム編成が必要である。そのため、将来検討委員会と教育課程委員会においてさらに議論を深める。
- FD委員会を早急に設置し、「学生による授業評価」と教育方法の改善を図る必要がある。また、授業担当教官間の緊密な連携により授業内容の充実を図る必要がある。
- 入学試験の多様化により多様な学生が入学しているので、これらの学生のニーズ及び学力に応じたカリキュラムの編成と授業方法を開発する必要がある。特に、専門高等学校及び総合学科卒業生の補習授業をさらに充実させ、効率的な授業を実施する必要がある。
- 入試制度について数年来検討を行ってきたが、平成16年度後期入試の変更を予告した。また、平成17年度前期入試の受験科目等について改正予定であり、平成17年度に変更を実施するための準備を早急に行う必要がある。
- 筑波学園都市の利点を生かし、インターンシップのさらなる充実を図る必要がある。
- 入学試験の多様化によって関連する業務が煩雑になっており、各入学試験の趣旨に合った入学方法の開発と業務の効率化を図る必要がある。
- 学生の就職状況などに対応して、インターネットの利用等の情報化を推進する必要がある。また、公務員試験の合格率を上げるための指導強化が望まれる。
- 学類を幅広く紹介するために、ホームページの改訂、充実をさらに急ぐ必要があり、現在、広報委員会で作業を進めている。
- 平成12年度に農学視学委員の視察を受けたが、この結果を基に近い将来に外部評価を受ける必要があり、そのための準備が必要と思われる。
- 短期留学推進制度や海外研修旅行等を利用して学生の国際交流を推進することが望まれる。
- 日本技術者教育認定機構(JABEE)の認定プログラムへの教育体制の強化が望まれる。